

〔共同研究：「大学生」に関する総合的研究(Ⅲ)―学生の意欲と調査・研究能力を高める教材、および教授法の開発―〕

社会調査教育の現段階と将来像

—大学教育の転換期における教材・教授法の開発—

木	下	栄	二
村	上	あ	か
阪	口	祐	介
高	井	昌	吏
吉	田	恵	子
角	谷	嘉	則
大	倉	季	久

はじめに

2014年度より、本学社会学部で社会調査を担当してきた教員が中心となって、「『大学生』に関する総合的研究(Ⅲ)―学生の意欲と調査・研究能力を高める教材、および教授法の開発」と題する共同研究プロジェクトを立ち上げた。社会調査教育は、初年次教育から演習、卒業論文の執筆まで、本学社会学部社会学科における教育の根幹部分を占める科目群を構成している。本プロジェクトでは、これまでの本学教員の教育実践の蓄積を活かすかたちで、新たな教授法・教材の開発や、教育上の課題の解決について研究を進めてきた。同じ社会調査教育を担う教員でありつつも、それぞれが専門とする分野も得意とする方法論も異なる。そこでプロジェクトでは、まずはメンバー相互の教育方法や教材の共有を図ることを重視して議論の深化を図った。

アクティブラーニングの導入や、企業や自治体、NPOなどの外部機関との連携の拡充など、今日、大学教育の潮流は大きく変わりつつある。社会調査教育の蓄積をベースにした本プロジェクトも、期せずしてこうした新たな潮流と接続が図られていくことになったのだが、こういった点をめぐっては、経済学部から参加を得たメンバーからの協力も得て、学部教育の新たな方向性や活性化の方途についても模索することになった。

その意味で、本研究は社会調査教育にとどまらない企図を持つものであったが、本稿では、

共同研究の経過を振り返りながら、このうちとくに社会調査教育の現段階とこれからについて、共同研究に参加したメンバーの具体的な教育実践のほか、授業内外で行われた実験的な試みの教育効果の検討や他大学での取り組みも含め、共同で実施してきた研究の成果に触れつつ紹介していきたい。今回取り上げる項目と執筆者は、以下のとおりである。

1. 社会調査実習（阪口祐介）
2. 社会調査特講—統計解析法（木下栄二）
3. アクティブラーニングとしてのフィールドワーク（村上あかね）
4. 初年次教育のあり方について（高井昌吏）
5. TA・SAについて（吉田恵子・角谷嘉則）
6. ゼミ生・卒業生への調査（村上あかね）
7. これからの社会調査教育をめぐる研究課題について（大倉季久）

これらについて紹介しながらプロジェクトを振り返って、社会調査教育をとりまく現状について、われわれが反省的（reflexive）に知覚していくきっかけとしたい。

（大倉季久）

1. 社会調査実習

本節では、「データ解析実習」と「社会調査実習」における授業の実践や課題について説明する。この2つの授業はそれぞれ一般社団法人社会調査協会の社会調査士科目のC+E, Gに対応しており、社会調査士資格のメインの科目といえる。目標は、1年（2コマ）を通じて、問題意識・仮説の構築から報告書の作成に至るまでの社会調査の全過程を経験し、社会調査を自身で計画・実施できるスキルを習得することである。一般的な履修の流れを説明すると、学生は1回生の後期に、社会調査の基礎を学んだ上で（「社会調査A」）、2回生の前期にグループワーク形式で比較的少数の質問紙調査を実施する（「社会調査B」）。また、2回生時には、多くの学生が「社会調査特講—統計解析法」（次節にて紹介）を受講し、統計手法を学んでいる。これらの授業で社会調査に関する一定のスキルを獲得した上で、学生は2回生後期の「データ解析実習」、3回生前期の「社会調査実習」を受講し、1年を通じて質問紙調査を計画・実施する。調査内容の詳細は年度によって異なるが、例年では、本学学生を対象として、サンプルサイズ300程度の集合調査（自記式）を行うことが多い。本学社会学部では、1994年度よりこうした形の実習を開講しており、毎年、社会調査実習報告書を刊行している。以下では、時間軸にそって授業の実践や課題について論じる。

1.1. 説明会の役割

学生は、2回生前期の「データ解析実習」を受講するにあたって、1回生の年度末（1月、

3月に2回)に実施される事前説明会に参加することが義務付けられている。この説明会では、実習担当教員が、1年間の授業内容や受講に当たっての注意、受講のメリットなどについて説明する。社会調査実習は、自身の研究が報告書として形になることや、社会調査の実践的なスキルを獲得できる点で非常にメリットが大きいものの、欠席は許されず、ほぼ毎回課題が与えられるなどハードルが高いという側面もある。説明会では、このメリットとハードルの高さを両方バランス良く学生に伝えるようにしている。前者は、授業への取り組み意欲のある者のモチベーションを高めるため、後者は、1年間授業の継続が困難である学生を受講させないためである。このバランスは意外に難しく、メリットを強調しすぎると意欲の低い学生を受け入れて、授業の進行の妨げになってしまうし、逆にハードルを高くしすぎると、意欲はあるが受講に不安を感じている学生を遠ざけてしまうこととなる。なお、2016年度の説明会の参加者は71名、「データ解析実習」の受講者40名である。説明会参加者の56%が受講を決めたことになる。

1.2. イントロダクション

初回の授業では、「データ解析実習」と「社会調査実習」の1年間のスケジュールを説明し、問題意識の構築から報告書の作成に至る全体の流れを学生にイメージさせる。これまでの報告書を手にとって見てもらいながら、1年後の完成形を想像させて、テーマの決定、問題意識と仮説の構築、調査票作成、データ分析、報告書の完成といった各プロセスについて、具体例を挙げながら説明する。受講者は、説明会を経て自身で受講を決めたということもあり、基本的には意欲の高いまじめな学生が多い。ただ、実習は1年間と長く、さまざまなプロセスがあるので、何をするのかかわからず、漠然とした不安をいだく学生もいる。全体的な流れをイメージさせることで、学生たちは意欲を持ち続けて自身の研究に取り組むことができるように思われる。

また、実習は1年と長く、共同作業も多くあるので、学生の交流を促進することが重要だと考える。そのために、初回では偏愛マップ(自身の好きなものを書いたマップを交換し、コミュニケーションをする)を用いたアイスブレイクをするなど、学生間の交流を促す授業をできる限り行うようにしている。

1.3. 研究テーマの決定

長期にわたって各自のテーマに取り組むという点では、社会調査実習は演習(ゼミ)と同じだといえる。演習は3年生から開始するので、2年生後期に始まる社会調査実習を受講する学生にとっては、はじめて本格的な研究に取り組むことになる。そのため、意欲が高いまじめな学生であっても、一体何から研究をはじめていいのか分からないというケースがある。そこで、授業の前半では、過去の実習生が執筆した報告書論文を読み、レジュメを作成、報告させる。この際、重視するのが、社会学的な問題意識、仮説、独立変数と従属変数、操

作化（概念と質問）、度数分布、クロス集計表の読み方、カイ2乗検定である。これによって自身がこれから進める研究論文の形式を理解でき、研究の方向性のイメージをつかむこともできる。また、報告書論文は、研究者ではなく、学生が書いた論文であるので、より身近に感じ、自分もできるという自信につながりやすいと考えられる。

そして、私の実習では、学生には「自身のテーマに継続的に向き合わせる」ことにしている。はじめから、テーマが明確な学生はほとんどいないし、自身のテーマについて一切考えることなく一瞬にしてアイデアが湧いてくることなどないだろう。長期にわたってテーマに向き合い、情報収集をしながら、考え続けることが必要である。そこで、まだテーマや問題意識が漠然としているはじめの段階から、全員に「どのようなテーマで何を調べるのか」を全員の前で話させる機会を繰り返し与えることにしている。テーマが徐々に明確になれば、問題意識や仮説も合わせて報告してもらおう。他の学生や教員からの意見や反論に対しては、時間がかかってもいいので本人の言葉で返答するようにうながす。十分に応えられなければ、次の報告までに考えておくように伝える。なお、ディスカッションを活発にするために、1人最低1回はコメントするように義務付けている。

問題意識が徐々に明確になり、仮説を作成する段階では、問題意識や仮説の良し悪しについて議論されることになる。ただ、問題意識や仮説の良し悪しについては、研究者でも意見が分かれることが多いので、非常に判断が難しいところである。そうしたことから、学生の問題意識や仮説については、私個人の感覚で「おもしろくない」とは言わないようにしている。ただ、やはり社会的に意義がある問題意識・仮説を説明することは必要だろう。そこで、過去に実習を受講した学生の中で私が優れていると考える報告書論文を取り上げて、その問題意識と仮説を紹介するとともに、なぜそれが優れているかについて私の見解を示す。ただ、以下のような仮説は問題があることを伝えている。

- ・あたりまえの仮説（通念・ステレオタイプを検証するという形なら問題なし）
- ・少数の事例で、量的調査で分析することが難しい仮説
- ・複数の仮説を示すが、独立変数と従属変数どちらも統一されていない
- ・分布の確認と仮説（独立変数→従属変数）を混同している
- ・相関と因果を区別できていない仮説

1.4. データ分析

私は、問題意識や仮説の構築と同時並行的に、データ分析の手法を実践的に学ばせることにしている。具体的には、社会調査実習室のパソコンルームにおいて、過去の社会調査実習の学生が行ったデータを利用して、統計解析ソフト SPSS を用いて分析を行う。統計手法としては、主に度数分布とクロス集計表である。学生は、このシンプルな分析方法を用いて、仮説構築、データによる検証、結果の解釈を行ったレポート作成し、報告を行う。ここで重視するのは、「分析結果から社会を読み解く」ことである。社会調査実習室には、過去の実

習生が実施した報告書や SPSS データがあり、学生はこれらを使用することが可能である。学生自身のテーマは多様ではあるものの、過去10年をさかのぼると関連したテーマがあることがほとんどである。これらのデータを実際に触りながら、仮説構築と検証を行うことで、学生が今後実施する質問や仮説はよりよいものになると考えられる。

カイ2乗検定、有意確率、有意水準の説明、行パーセントの読み取りは、やはり多くの学生にとって簡単ではないようなので、できるかぎり丁寧に教えるように心がけている。また、独立変数を行に、従属変数を列に配置する際に、逆にする学生も時々見かけるので、注意するように伝えている。これらの説明を聞いただけでは、まだ理解が不十分な学生も多いが、実際にこれらの方法を用いた分析レポートを作成・報告させると、学生の理解度は深まるように思われる。

1.5. 質問紙の作成

各自の質問がある程度、完成した段階で、質問を一度、取りまとめて、全員で質問に回答し、意見を交換する機会を設けている。この段階では、学生自身が現在考えているすべての質問を出してもらっているので、実際の調査票の完成のためには半分以上の質問を削除し、質問の順番の調整する必要がある。これらについて、学生同士で主体的にディスカッションをさせて、調査票を完成させる。学生には、「仮説を明確に示すことができなければ、質問を削除する」ことを伝え、なぜ質問が必要であるのかを他者に説明する機会を設けている。

以上が、私自身の実習の実践と課題である。ただ、私はこれまで実習を5回、担当しているが、授業実践や課題は毎年のように変化している。1年を終えると必ずなんらかの課題が見つかり、次回はまた違う形の授業実践を取り入れることになる。また、年度ごとに、学生の人数、特徴や雰囲気、ノリは当然、異なっており、これらに柔軟に対応しながら、授業を進めている。今回記した授業実践と課題はあくまで私自身の現状である。より学生の社会調査スキルを高める授業を目指して、今後も課題の発見と新たな授業実践の導入を行っていきたいと考える。

(阪口祐介)

2. 社会調査特講—統計解析法

2.1. 位置づけと目的

「社会調査特講—統計解析法」の授業実践と課題について述べる。この科目は、社会調査士資格取得に必要な「社会調査に必要な統計学に関する科目 (D 科目)」に対応している。一般社団法人社会調査協会の HP によると、この科目は「統計的データをまとめたり分析したりするために必要な、推測統計学の基礎的な知識に関する科目。確率論の基礎、基本統計量、検定・推定理論とその応用 (平均や比率の差の検定、独立性の検定)、サンプリングの

理論、属性相関係数（クロス表の統計量）、相関係数、偏相関係数、変数のコントロール、回帰分析の基礎など。（90分×15回相当）」とあるが、話すだけならともかく、学生に全てを理解させることには困難を感じている。本学の場合、履修者の多くが「データ解析実習（C、E科目）」「社会調査実習（G科目）」も履修しており、むしろ実習では十分に講義することが難しい細かな数字の意味、特に有意確率について理解させることに主眼をおいてきた。

授業では、まず基本統計量を説明したあと、確率論の説明に時間をかける。そして、SPSSでの分析結果に示される数値が手計算でも算出できることを、多くの課題をこなさせながら理解させる。文科系学生が最も苦手とする科目であるが、履修している学生たちのほとんどが社会調査士資格の取得を目指す「やる気」のある学生たちであり、かつ少数（10～30人程度）でもあるため、授業はやり易く、ほとんどの学生が単位取得まで到達できる。

2.2. 基本統計量

最初の3回程度、数字や数学に慣れることも意識して、基本統計量について、分布の中心を表す平均、中央値、最頻値、分布のばらつき具合を表す分散と標準偏差について講義する。昨今、「割り算のできない学生がいる」とお嘆きの方もいるが、このクラスにさすがにそんな学生はいない。グラフ等を使って説明すると、ほぼすべての学生がここまで理解できるようだ。

ばらつきを数値化するには、絶対値を使って「平均からの距離の平均」と説明した方がイメージはしやすいのだが、確率空間と対応させるためには、どうしても二乗して二次元にすることが必要になる。おかげで、必ず $\sqrt{\quad}$ の理解を確認することになるが、「ゆとり」初期世代に比べて、最近の学生の方がきちんと教育を受けている印象がある。

標準偏差がでたところで、偏差値の説明まで進む。「基準化の公式」を含むので、ピアソンの積率相関係数の説明のためにも有益だ。さらに、偏差値がなぜ日本社会にだけこれほど浸透しているのか考えさせるのは社会学科の醍醐味でもある。

授業の滑り出しは、たいいていの場合順調であるが、やはりそこは文科系、記号や数式に慣れるのは大変なようだ。だいたい、総和を示す Σ と、標準偏差を示す σ がどちらもシグマなのは、一体誰が決めたのだろう。

2.3. 確率のはなし

(1) 正規分布という山

4回目くらいから、いよいよ確率のはなしに入る。まずは100円玉を使って、「コイン投げ」実験を実演する。まずは2枚の100円玉を投げて、表の数を当てさせる。「2枚とも表」と答える学生がいれば、「きみは確率論に向いていない」というわけだ。徐々に枚数を増やして遊んでいけば、正規分布の卵が誕生する。

次は、赤玉白玉を想定しての「繰り返し実験」となる。ごくたまに「非復元標本確率」を

気にする学生がいるが、母集団が十分に大きいとして無視する。実際に箱と玉、おまけにレゴとか積木があると良いのだが、作るの面倒なので黒板を使って説明してきた。大事なことは「ガチャガチャかき混ぜる」こと（無作為抽出）と、いっぱい繰り返すこと（大数の法則）。まあ千回もやれば、正規分布近似ができる。学生たちには見慣れない山の登場だが、要するに事象によって出現確率が違う、おまけに正規分布の場合は、その標準偏差で出現確率もわかる（ ± 1.96 標準偏差に全面積の95%）。だから、「正規分布はいい奴だ」と思って欲しいのだが、この辺から遠くを見つめる学生も現れ始める。

ここで学生諸君を現実に戻すためにも、「私はこの箱の中に赤玉白玉を同数入れたつもりじゃ。でも分からなくなってしまった。すまんが、ガチャガチャかき混ぜたうえで、10個だけ玉を取り出して、箱の中が白玉赤玉半々かどうか考えてくれないか」と無茶な要求をしてみる。まったく無茶な話だが、「もし取り出した10個がすべて赤玉だったら」とたまたまかける。こうなれば「半々」と答える学生はいない。しかし、問題はその理由だ。先の正規分布近似との関係で、もし「半々」であれば、10個とも赤玉である確率は極めて低い（約0.1%）からとわからせるのは一苦勞である。

苦勞ではあるが、ここは踏ん張りどころ。後述する帰無仮説や、標本調査と「繰り返し実験」の関係（標本調査は繰り返し実験の1回だけのもの）を理解させるためにも、まさに繰り返し何度でも説明する。要するに、推測統計学の世界では、確率の低いことは起こらないのだ（と言って、過誤になってしまうこともあるが）。

(2) 中心極限定理という断崖絶壁

無茶な要求を無茶にしないためにはどうするか。10個なんてケチケチせず、もっとたくさん取り出せばよいのだが、どれくらい取り出せばよいのだろう。おまけに出現した事象の出現確率も知りたい。そこで、便利な道具として中心極限定理があるわけだが、学生にとってはまさに「なんじゃそりゃ??」状態、乗り越えるべき山どころが、恐怖の断崖絶壁である。

ここはこちらも力技。定理という言葉に怯える学生達を、「要するに、なんでもいっぱいやれば正規分布になる。そして、取り出す数を増やせば（標本を大きくすれば）、正規分布は痩せていく（中心に集まる）、難しく考えるな」と叱咤して、標本誤差に関する二つの公式（比率の場合と実数の場合）を使った練習問題を多発する。

ここまですれば、推定理論からサンプリングの公式へと進みたいところだが、ほとんど紹介だけで済みます。どのみち、信頼度95%で標本誤差5%なら400、2.5%なら1600というマジックナンバーがある訳だし。

2.4. 分析のはなし

やっと分析に入る。比率の差の検定、平均値の差の検定、 χ^2 検定について、手作業（電

卓と正規分布表、 χ^2 分布表は必要)をさせながら、帰無仮説と検定の考え方の理解を目指す。とにかく作業をさせないことには、学生の魂がどこに遊びに行ってしまうかわからない。帰無仮説が正しいとして、調査結果で得られた数値は、想定される分布のどこに位置づくか、つまり出現確率はどのくらいなのか、ということだが、日常ではあまり使わない考え方なので、頭だけではなかなか理解が難しい。全身を使っての理解が必要だろう。

さらに、SPSSによる χ^2 検定と、平均値の差の検定結果を示して、そこにある細かな数字(ピアソンのカイ二乗、漸近有意確率、自由度、t値などなど)が、手計算でも算出できることを説明して、分析の意味を分かってもらうようにする。

ここまででかなりの時間を割いてしまうので、回帰分析、ピアソンの積率相関係数、分散分析についての説明が不十分になるのが毎回残念であった。変数のタイプによって多様な分析方法があることを一応説明はするものの、我ながらアリバイ的な気がしてしまう。

ちなみに社会福祉士資格国家試験の出題者は、ピアソンの積率相関係数がお好きらしい。何度も「変数の単位を変えても、係数の値は変わらない」に関連した設問がある。そりゃ、共分散を標準偏差で除す、つまり基準化の公式を掛け合わせているのだから値は変わらないのだけど、そんなに簡単に理解させることができるのかといつも不思議に思っている。

2.5. 課題

試験は、比率の差の検定と χ^2 検定の計算、および結果解釈の問題を中心に出题する。授業中に何度も練習問題を出している(たまに「先生、数字変えないで」とわめく学生もいるが)ので、ほとんどの学生はきちんとした答案を書いてくる。

以下に、残されている課題について述べる。大きな課題は、前述したように多様な分析方法の存在や、その使い方について十分に説明する時間が取れないことだ。筆者の力不足を棚に上げて言うならば、本当に理解させるには90分×15回で十分なのだろうか。話すだけならできだろうが、理解させることには困難な印象を拭いきれない。

さらに、学生の理解度を計りつつ授業を進めるためには、どうしても少人数クラスにせざるを得ない。私学としてはつらいところだ。

もちろん統計解析を理解するためには、講義を聞くだけではなく、実習等で自ら試行錯誤しながら実践していくことが大切だ。「データ解析実習」「社会調査実習」等との連携の再調整、社会調査関連科目間の役割分担等について常時見直していくことも、効果的な教育の実施には必要なことであろう。

最後に、文科系学生には数式や記号、あるいは定理という言葉が苦手なものも少なくない。統計解析の授業にあたっては、彼らに統計学を嫌いにさせないように、教員だけの独りよがりの授業にならないように気を配ることが、もっとも大きな課題かも知れない。

(木下栄二)

3. アクティブラーニングとしてのフィールドワーク ——コリアタウンフィールドワークの実践から

学生の意欲と能力を高めるような教材・カリキュラムを考えるにあたり、近年重要なキーワードとなっているのは「アクティブラーニング」である。必ずしも「アクティブラーニング＝体験型学習」とはかぎらず、たとえば授業中に問題を解くこともアクティブラーニングの一つと捉える立場もあるようだ。しかし、社会学をはじめ多くの学問領域にはフィールドワークの伝統があり、それは現代でも引き継がれている有力な研究手法の一つである。そこで、本学のカリキュラムへの導入可能性を検討するため、大阪・鶴橋にあるNPOにお願いし、コリアタウンフィールドワークに参加した。なお、以下に示す学生・教員の感想や文章は文意を損なわない範囲で読みやすくなるよう手を入れている。

2014年度は特定非営利活動法人コリア NGO センター (<http://korea-ngo.org/index.html>) に依頼し、教員のみが参加した。代表理事である郭辰雄（カク・チヌン）さんの解説を受けながら商店街を歩き、伊勢志摩からの鮮魚列車や街並みに隠された歴史について学び、疎開道路を超えて K-POP ショップに立ち寄り、御幸森神社、キムチ屋さんを回り、班家食工房（日韓文化交流施設）に到着した。ここではコリアタウンの歴史と現状についての講演を聴き、ハンゲル学習や伝統遊び体験を行い、最後に懇親会で交流した。近年では状況は変化しつつあるとはいえ、年金問題、就職、世代間の違い、結婚問題など日コリアンを取り巻く課題の重さを痛感した。新大久保のコリアタウンとの違い、鶴橋駅周辺のにぎわいは環境省の「かおり風景100選」に選ばれていることも知った。

教員の感想は「何気ない横断歩道も、（ヘイトスピーチ対策法が成立する前に鶴橋駅前で行われたヘイトスピーチへの苦肉の策として、歩道の幅を拡張したという）専門家の説明を受けて世界が劇的に変わって見えた」、「戦争の歴史を改めて実感した」、「韓国でも日本でも子どもの遊びは似ている」、「現代社会の『生』の姿を実地で体験できる」、「通天閣と違う大阪を感じた。学生を連れて行ってみたい。安い」、「前と比べて行きやすくなり、ある意味観光地化している」、「熱気がある」、「社会の変化を感じた」、「豚足、民族衣装（チョゴリ）、キムチ、K-POP ショップが印象的」、「学生さんから K-POP スターの話はよく聞く」、「自由行動があってもいいかもしれない」などであった。

2015年度は NPO 法人多民族共生人権教育センター (<http://www.taminzoku.com/>) にお願いし、学生と教員がフィールドワークに参加した。学生には感想だけではなくフィールドワークを授業に取り入れるとしたらどのようなのがよいか提案もするよう依頼した。

理事の文公輝（ムン・ゴンフィ）さんの解説を受けながら鶴橋駅を出発し、焼き肉店が集まる通りを抜けて商店街を歩き、民族学級がある小学校前、御幸森神社、鶴橋の地名の由来である「つるのはし」跡公園も訪れた。「ぱだん」（つるはし交流ひろば）では、パネルもみながらコリアタウンの歴史と現状について講演を聴いたが、とくに外国人の地方公務員採用

における国籍条項について、文さんご自身の当事者としての具体的な体験を話していただいた。その後、自由時間に各自が市場で求めたお惣菜やドリンクを持ち寄って懇親会を開いた。市場でアジュンマ（おばさん）と会話をしながら買い物をしたことは、学生にとって在日コリアンの存在をリアルに感じた瞬間だったようである。

学生参加者の大半は関西出身であるが、ほとんどはコリアタウンに行ったことがなかったそうである。「小学生のころから戦争について学習したことはあっても、それは日本側の知識であり、不十分と感じた。普段考えたことがない多文化共生を考えるきっかけになった」、「焼肉やキムチのにおいが印象的だった。誰がチョゴリを買うのか疑問に思っていたが、説明を受けて納得した」、「私たちの当たり前は一步外に出ると当たり前ではない。これは多民族共生だけではなくLGBTの問題にも通じる」といった意見のほか、在日コリアンへの差別を憂う意見・感想も散見された。教職志望の学生は「自分もフィールドワークを上手にできるようにになりたいし、自分が見聞を広げることで差別がなくなればよい」と感想を書いていた。

大学の授業としてフィールドワークを行う場合の提案として、学生からは「実際に現場に行くことで理解が深められることもあるので、テーマ次第ではフィールドワークもよいと思う」、「現代社会はインターネットがあるので見たものをなんでも知っているかのような錯覚に陥りがち。五感を使ってポイントごとにお話を伺って写真を撮ることで、場面ごとに情景が記憶され後からでも鮮明に浮かび上がる。学んだことを自分のものとしてアウトプットするにはそれなりの時間が必要なので体験授業は有意義だと思う」「事前学習をした後にフィールドに出かけるとよりよい実践教育につながる」、「3～8名くらいの規模がよい。大人数は参加しにくい。1時間だと時間が足りないので、1、2限というように連続したほうがよいと思う」、「講義の後に自由時間があると参加しやすい。交通費があると遠方からの学生も参加しやすい」、「グループワークで自分や他人の考えを共有することもよいが、実際に自ら足を運んで自分の目で見て考えることが重要。フィールドワークの後にグループワークで意見を交換したり、講義で復習することが効果的だと思う」「説明を受けなければ興味を持たなかった場所がたくさんあり、説明を受けてからフィールドに出る重要性を感じた。一方で、あえて事前の知識を持たずに現地に行くことで、自分で疑問をみつけて解決しようとする自発的な学習につながる。15回分の授業なら、たとえば2回目にコリアタウンに連れていき、『なぜ』を見つける。3～10回の授業で講義を受け、そこには歴史や韓国語の豆知識なども盛り込む。11回目では、再度フィールドワークをすることで理解が深まる。12～15回目で当時の写真と今の写真を比較したり、ゲストをお招きして講義をしていただくことで、基本的な知識をさらに発展させ、問題の理解も深まると思う」「ゼミくらい的人数（4人×5グループ）で、各グループでテーマを決めて調査をする（例：食文化、歴史、行事など）。日本文化との比較（違うところと同じところ）をしたり、学期の終わりにグループ発表をして、フィードバックや振り返りをする」といった具体的な提案があった。

教員からは「大学の授業の一環としては、都市社会学やエスニシティ研究にかかわる分野の専門演習で行うのがベスト」「地図を持たせて記入させたり、ボードがあるとよい」との提案があった。

2度にわたるフィールドワークは経験豊富なすばらしいナビゲーターのおかげで深い学習ができたことに厚く御礼申し上げたい。深い学習のためにはナビゲーターの存在が必要だと感じた。授業でフィールドワークを行う際の課題としては、NPOへの謝金や学生・教員の交通費、安全性の確保、カリキュラムの構成と評価基準の設定など検討すべき課題がある。しかし、現代社会の問題を考察するにあたってフィールドワーク型のアクティブラーニングは有効な手法の一つであり、今後、具体的な検討が望まれる。

(村上あかね)

4. 初年次教育のあり方について

4.1. 初年次教育の目的

ほとんどの一回生は、ついこの3月までは高校生だったはずである。したがって、大学へ来る動機づけを与えることや、高校とは違った大学での学びの作法を教える必要がある。概要としては、次のようなものが挙げられるだろう。

1. 学生に対して、高校と大学の違いを理解させる。そして、受講、演習への参加、レポート作成などに必要なアカデミックスキルを習得させる。
2. 初年次教育（1年生ゼミ）を通して大学での友人関係を構築し、学校に来る動機づけを与える。

4.2. 具体的な方法

上記1に関して

- ・ 井上俊ほか編『文化社会学入門—テーマとツール』（ミネルヴァ書房、2011年）を取り上げ、グループに分けて発表を行う。4回に1回くらいは、学生個人に発表の機会が巡るようにする。
- ・ レジュメはまず教員が見本をみせる。内容もさることながら、まずはレジュメの形式を徹底的に教える。ここでつまずくと、2回生以降の発表・レポート作成に支障がでる。
- ・ 図書館ツアーを行い、本学図書館における書籍・論文・データの探し方、新聞検索の方法なども理解させる。
- ・ 常に発表に対して「発言する」という癖をつけさせる（その点が、高校と大学の大きな違いともいえる）。「発表を聞いたが、理解できなかった」というのならまだしも、他の学生の発表を「全く聞く気がない」「聞くに値しない」という態度は、ある意味で発表者に対する冒瀆でもある。したがって、発表に対して必ず何かコメントすることを徹底

させる。

- ・ 自主的に発言する学生は少ないので、教員が学生個人を当てるケースが多い。ただ、発言の内容もさることながら、発言の「有無」が成績に大きく関係することは、事前に強調しておく。

上記2に関して

- ・ グループ発表が一回りしたら、くじでグループを入れ替える。同じ人が同じ班にならないように工夫する。これは、友人関係を広く充実させ、大学生活を有意義なものにするのにも役立つと考える。
- ・ 基礎演習が4限だったので、なんばに移動してフィールドワークを行った。具体的には各グループに「通り」や「筋」を割り当てて（千日前通り、道頓堀、道具屋筋、御堂筋など）、調査した。調査終了後は、学生たちとともにお好み焼きを食べ、親睦を深める。ただ、体育会系の学生が参加できないのが難点である。
- ・ フィールドワークの結果を、写真やパワーポイントなどでグループごとに発表させ、質疑応答を行った。これは社会調査の方法を教えるという意味もあるが、むしろグループワークを通して人間関係を構築するという効果を狙っている。

4.3. 今後の課題

- ・ 学生によって、PCを使う能力にかなりの差がある。WordやPPT（パワーポイント）を使えない学生もいるので、何らかの対応が必要である。
- ・ 他大学の初年次教育と比較することも有効かもしれない。たとえば、現在筆者が所属する東洋大学社会学部の初年次教育も本学とほぼ同様の内容であるが、東洋大学は通年であり、秋学期は英語を使用している。
- ・ 今日では大学教育もグローバル化が叫ばれ、英語による教育の重要性が強調されている。東洋大学では、端的に言えば上記のフィールドワークの発表・質疑応答を英語で行っている。具体的には、1年のゼミ生全員で井の頭公園へ行き、そこで現代の社会・文化を象徴するものを写真撮影する。その写真をパワーポイントで映し出したうえで、それが現代の社会・文化とどのようにかかわっているのかを、英語で説明・質疑応答するのである。学生にとってはなかなか語学力の面で難しく、英語原稿の棒読みになってしまう者も少なくない。だが、英語による発表に慣れるという意味では、一定の効果がある。このような教育を取り入れるのも、ひとつの案である。

(高井昌史)

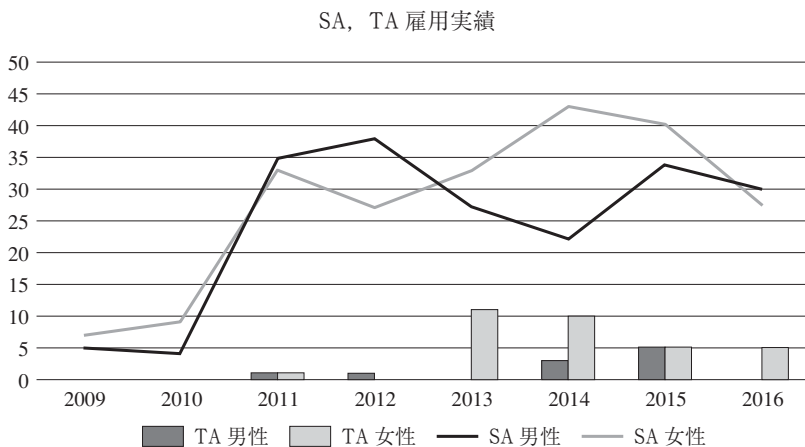
5. TA, SA 制度について

5.1. 本学の TA, SA 制度の活用について

ここでは、2009年度から始まった本学の TA（ティーチング・アシスタント）、SA（スチューデント・アシスタント）制度について述べる。この制度は FD 活動の一環として、授業改善のために導入された制度である。大学院生がアシスタントとして雇用されると TA、学部生がアシスタントとして雇用されると SA と呼ばれる。業務範囲は演習・実習の運営補助、グループワークのどの補助、授業理解促進のための指導補助および支援、学外見学引率補助、レジュメ・教材等の配布等である。ただし、TA、SA は成績評価に関わる業務を担うことは出来ない。雇用にあたり、学生は必ずオリエンテーションに参加し、制度の目的、SA の役割と業務範囲について説明を受けた後、必要な手続きを行う。

図は SA, TA の雇用実績を表している。2009年度、2010年度はトライアル事業として実施されていたため男性、女性ともに10人を下回る人数が雇用されているが、本格的に実施された2011年以降は男女合わせて60名程度の SA が雇用されていることがわかる。TA はただし、複数科目で SA もしくは TA として採用されている場合、科目ごとに1名でカウントされている。TA 制度は2011年以前に存在しなかったため、2011年度の TA は SA として雇用された大学院生を示している。TA 制度は2012年にトライアル実施が始まり現在に至っている。SA 制度における雇用と比較すれば少ない値となっているが、毎年10名程度が雇用されている。

(吉田恵子)



5.2. 立命館大学の TA 制度について

① 立命館大学の TA 制度

1992年度に制度として発足した。毎年、大学院生の 1/4 程度が TA として登録されている。

近年では、2012年度1,303名、2013年度1,230名、2014年度1,221名、2015年度1,304名であった。

② 立命館大学の TA 制度の目的

「TA 制度は本学大学院学生を TA として採用し、教員とともに教育を補佐・援助することを通じて、本学の教育の向上に資することを目的とする。また、大学院生自身にとっても、自らの教育力を高め、研究者・教員等の進路への重要なキャリアとして位置付けられるものとする。」…『ティーチング・アシスタント制度に関するガイドライン』より引用

③ 業務範囲

TA 業務は、教員の責任のもとにおこなわれる。

- ・授業中における業務…実験・実習補助、学生への助言、グループワークなどの補助、授業アンケート等の実施、出席管理補助、情報機材の操作補助、資料配布、授業の VTR 撮影、学外見学引率補助（授業時間内）、授業環境の維持
- ・授業外における業務…授業の発表・報告のための指導及び支援、授業理解促進のための指導および支援、授業に関する学生のレポート・ペーパーなどに関する指導、レジュメ・教材等作成補助、コースツール・授業に関連する HP の運用支援やメンテナンス、学外見学引率補助（授業時間外）、期中のレポート・小テスト・授業感想などの整理
- ・学部・研究科教学関係業務…学習相談室等での勤務、卒業論文指導補助、自主的学習活動の指導および支援、学内ゼミ大会やゼミ大会に関わる指導および支援、学部共通教材の開発・準備に関する補助

担当する授業 大学院生の所属	学部	前期・修士・専門職学位課程、 一貫制博士課程の2年次まで	後期課程、一貫制博士課程の 3年次以降
前期・修士・専門職学位 課程、一貫性博士課程の 2年次まで	○	×	×
後期課程・一貫性博士課 程の3年次以降	○	○	×

④ TA が担当できない業務…成績評価、TA 業務に関係ない教員の秘書的な業務

- ・定期試験およびレポート試験について、TA が関係することはできない。
- ・日常評価に関わる小レポート、小テスト、出席などについては、教員の最終チェックおよび責任を前提として、TA がその一部を担当することができる。担当ができるのは、記号選択問題など単純な採点、答案やレポートの事前チェック、出席の集約などとする。ただし、どのような場合でも、点数化・評価（A+/A/B/C/F など）、成績の管理、採点報告表への転記について、TA が携わることはできない。また、成績評価に関係する出席簿・

小テスト・小レポートの現物管理も教員の責任である。

⑤ アンケート結果の概要

立命館大学による TA・教員に対するアンケート調査が毎年行われている。2013～2015年度の結果から、その特徴についてまとめていく。

- ・TAの動機は「経済的理由」、「教員からの依頼」、「授業への興味」の順である。
- ・TAの満足度は、高い（「非常に満足している」、「ある程度満足している」）。
- ・業務は「資料の配布・回収」、「出席管理」、「学生の個別指導」、「実験補助」の順が多い。
- ・負担は「特になし」がもっとも多いが、「業務に費やす時間」、「授業内容の深い理解」、「受講生とのコミュニケーション」が挙げられている。
- ・トラブルは、「遅刻した受講生と出席管理に関わるトラブル」や「コミュニケーションペーパーの代理提出をめぐってのトラブル」、「理解し易い説明が出来なかった」、「受講生が言うことをきかなかった」などが挙げられている。

参考 web ページ

立命館大学教学部大学院課ホームページ（2017年1月25日閲覧）

http://www.ritsumeit.ac.jp/ru_gr/g-ta/ta_data/

（角谷嘉則）

6. ゼミ生・卒業生への調査

本プロジェクトを進めるなかで、学生の意欲と能力を高めるような授業を考えるためには、まず学生の現状認識等の把握が必要との意見があった。そこで、この共同研究に参加している教員のゼミ生を対象に簡単な調査を行うこととした（以下、「4年生調査」と表記）。就職活動にたいする学生・保護者のニーズが高いことから、2015年度秋学期に4年生を対象として（a）就職活動をしていて、やっておいてよかったこと（授業・授業以外）、（b）就職活動をしていて、やっておけばよかったこと（授業・授業以外）について無記名で自由に記述するよう依頼し、自由回答を整理した。以下に示す意見はいずれも貴重であるが、まだ学生であり社会人として働いた経験はない。

そこで、2016年度のホームカミングデーに来訪した卒業生に「思い出や後輩へのメッセージ」を書いてくださるよう依頼した（以下、「卒業生調査①」と表記）。ホームカミングデーの公式行事終了後、09～12生の若手と教員の懇親会を行い、その席上で「やっておいてよかったこと」「やっておけばよかったこと」について簡単なアンケートを行った（以下、「卒業生調査②」と表記）。教員や学プロ（社会学部学生リーダー育成プロジェクト）を通じて来場を呼びかけたこともあり、以下に示す回答には対象者の特性が強く反映されていることに留意されたい。

なお、3つの調査とも協力は任意であり、学会報告や論文などのかたちで公表する旨を伝えている。また、以下に示す回答は文意を損なわない範囲で読みやすくなるように手を入れたり、似たような内容をまとめたりしている。

(1) 4年生調査

(a) 就職活動をしていて、やっておいてよかったこと

①授業で

- ・ ゼミ 就活でゼミについて聞かれることがある。積極的に取り組んだこと。調査研究。発言や発表、レジュメや卒論構想で自分の考えを説明する力がついた。学生研究発表大会、ゼミガイダンスに参加したことなど、ゼミを評価する声が多かった。
- ・ 授業 就活で授業について聞かれることがある。目指す業界がある人は関連する授業を取るとよい。授業終わりに先生と話をすると面白い。どの授業もまっさらな気持ちで受けること。できるだけ理解しながら聞く。学んだ知識をまとめて自分の言葉で記入するテストで文章力が向上した。ノートをしっかりとる。挙手して発言する。そのほかにはグループディスカッションのある授業やレポート課題のある授業を取っておいてよかったという意見、キャリアデザインの授業、社会調査士、人的資源管理論B、ジェンダー論など具体的な科目名を挙げる意見もあった。
- ・ 単位 3回生まだに単位を（ほとんど）取り終えておくこと、取っておいたので余裕があったとする意見も目立った。
- ・ PCスキル、エクセルやワードの使い方、メールの書き方が挙げられた。

ゼミの教員を通して調査への協力を依頼したことから、ゼミに関する意見が多かった。そのほかにはプレゼンテーションや論理的思考力を身につけること、といった意見もあった。「特になし」という回答もわずかながらあった。

②授業以外で

- ・ キャリアセンターの活用 企業説明会への参加。就活塾。就職合宿。セミナーやインターンシップへの参加。特に何もなくてもキャリアセンターに行けばよいと思う、という意見のほか、（かならずしもキャリアセンターでなくてもできることであるが、キャリアセンターが提供するものとして）資格取得、面接練習、履歴書の添削、筆記試験の対策、マナーや身だしなみ、礼儀作法などが挙げられた。面接（練習）を通してやりたいことが明確になった、面接では時事ネタを振られることが多いので常にニュースや新聞をチェックしておくこととの記述があった。
- ・ 海外体験 海外の日系企業の調査。2週間程度の留学。異文化に触れることができ視野を広げられた。学校の海外研修制度を使ったので安く手間も少なく貴重な体験が

できた。広い世界をみたことで社交性、国際化社会に身をおく者としての考え方を身につけた、とあった。

- ・ コミュニケーション 先輩と話すとアドバイスをもらえる。知り合いを多く作る。人に気軽に頼ったほうが良い。先生や職員さんなどいろいろな人と接する、との意見が寄せられた。
- ・ アルバイト アルバイトを長く続けること。様々なアルバイトをすること。アルバイトを辞めること、など異なる意見が混在していた。

その他、サークルや委員会、部活、ボランティア活動、スポーツ、情報収集、積極性、お金を貯めるといった回答があった。

(b) 就職活動をしていて、やっておけばよかったこと

①授業で

- ・ 授業への積極的な姿勢 グループワークを積極的にしておけばよかった。Aを多くとっておけばよかった。意欲をもって理解すること。予習復習すること。話を聞いて質問したり、発言すること。メモを取る。理解できないことはすぐに調べる、と具体的な回答があった。
- ・ 今後のためになる授業 自分の志望業界に関する授業、経済経営など社会の仕組みに関する授業、マクロ経済学という回答のほか、所属学部以外の授業をもっと履修しておけば知識や視野が広がるといった回答、興味のある授業をもう少し受講すればよかったとの声があった。
- ・ 情報共有やコミュニケーション 上級生、ゼミ生、ゼミの教員、OB・OG、外部との交流。ゼミ以外の先生とももっと話す機会を持てばよかった。友人をもっと作っておくべきだったなど人間関係に関する意見も多かった。

ここでも「特になし」という回答がわずかながらあった。満足しているから「特になし」なのか、期待していないから「特になし」なのか、自由記述からでは判断できなかった。

②授業以外で

- ・ 就職活動 もっと早く準備しておけばよかった。もっと積極的にイベントに参加すべきだった。インターンシップに参加すべきだった。大学にある施設や設備をフル活用すべき（図書館・キャリアセンター・学生支援課など）。業界研究・企業研究をたくさんする。早いうちからして準備をして選択肢を増やしておく。面接対策。筆記試験対策。スケジュール管理。新聞やニュースを読む。日本の歴史を知る。（ボールペンで）字を丁寧に書く。マナー、資格など具体的な意見が多い。試験対策では数学の必

要性を挙げる意見も目立った。

そのほかには海外留学、趣味、部活やサークル、一人暮らし、ボランティア、いろいろな体験、自分の行動次第などがあった。

学生へのアンケートと並行して教員にも尋ねたところ、「先輩やOB・OGとのつながりが少ないと感じている。SAやTAがいると将来や就職活動について気軽に相談できるようだ」、「面接でどんな授業に興味があったか、ゼミで何をしているか、社会学は何を学ぶか」とわりと聞かれるので、ゼミで一度練習しておいてもよい」「PCメールの書き方について教えておいたほうがよい」「時事問題、教養、表現力、読書」との回答があった。

この調査結果からは、授業やゼミにしっかり取り組むこと、早くから入念に準備をすること、人とのつながりが重要であることが浮かび上がる。アルバイトやクラブ・サークルに関する意見は意外に少なかった。授業やゼミにしっかりと取り組むことで単位も確実に取得でき、余裕をもって就職活動に臨むことができる。そして、人とつながることによって、視野が広がったり、助け合ったりすることができる。これらの声を授業や正課外の活動にどのように生かしていくか、本学の課題としてさらに取り組むべき事柄といえよう。

(2) 卒業生調査①——卒業生の思い出・後輩へのメッセージ

思い出やメッセージという性格上、「ですます調」で書かれていたものが多かったため、元の表記を尊重し、「ですます調」で表記する。以下、卒業年次順に示す。

- ・ 「外で授業がなくなった最後の世代です。おかげでバイトもたくさん。九州旅行」(76S)
- ・ 「登美丘時代のOBです。桃大の進化、うれしくもあり、悲しくもあり、旧軟式野球愛好会はどうなったのかなあ」(79S)
- ・ 「Kゼミに入って本当に良かったと思います！！恩師と仲間と思い出がいっぱいできました。在学生へ、在学中も卒業してからも桃大を大好きでいてくださいね」(98S)
- ・ 「大学の一番の思い出は、ゼミだと思います。なので、どのゼミにするかが重要です！」(98S?)、
- ・ 「授業、サークル、学生といろんな思い出がありますが、そのなかでもゼミがとて楽しかったです。卒論は大変だったけど(笑)。今でも時々集まれるつながりがあるのは幸せなことです」(98S?)
- ・ 「社会調査実習やゼミが楽しかったです！多面的なモノの見方ができるようになったことは自分にプラスになりました」(07S)
- ・ 「大学時代、遊びに勉強に全力でした。あの時の思い出が、人間関係が財産だと思い

ます」(07S?)

- ・「授業，ゼミ，先生方…。懐かしいです。時間が空いたら図書館に入っていたのもいい思い出」(08S)
- ・「たくさんお酒をごちそうになりました。ありがとう！経済学部ですが，興味があり社会学をたくさん勉強しました。今でも自分の糧になっています」(09E)
- ・「とってもたくさんお世話になりました。とってもお酒は飲みました」(09S)
- ・「大好きなI先生に会いに来ました。ステキな社会学の先輩にもあえてよかったです。たのしかったー♪」(10S)
- ・「調査実習で学んだことが少なからず今の仕事で役に立っています。事務職を目指す人は必ず取りましょう。お酒は適度に楽しく，飲みましょう」(12S)
- ・「学生に戻りた～い！！サークルにゼミに教職。なんかいろいろしてて良かったなー，と思います」(12S?)
- ・「社会学を学べたこと，学プロ，ゼミ，全部宝物です。ありがとうございました」(12S)
- ・「皆学べよ～，遊べよ～」(12S)
- ・「職場の研修を利用して編入し，職場復帰後，昇格しました。Thanks a lot」(?)
- ・「公務員試験やPC資格の講座を受けて，夢に向けて勉強できてよかった。アンデレクロス等で食堂の改善に向けて勉強会などをしている記事を見て，いまの桃山の味が気になっています」(?)

ゼミに限らず，勉強したこと，遊んだこと，人とのつながりを挙げる意見が目立つ。

(3) 卒業生調査②——やっておいてよかったこと，やっておけばよかったこと

この調査内容を公表するにあたっては，回答者が特定できないように回答者の記述をトピックごとに切り分けている。

(a) やっておいてよかったこと

①授業で

- ・ エクセル，ワード，PPT ができ，MOS くらい持っているとう仕事の役に立つ。使えないと相手にされない。自分で調べると言われる。授業で学んだことを自分の生活にあてはめると楽しい。
- ・ ゼミに入っておいてよかった。大学生活の半分を過ごすことになるので，ゼミならではの経験ができたと思う。
- ・ 量的・質的調査どちらもとれてよかった！ためになる！使える！学プロも2年間です。

ろいろなことができて楽しかった。

- ・ 教職課程。
- ・ 社会調査実習は将来統計を使わないとしても役に立つ。
- ・ 暗記をする義務教育と違い、自分の意見や実習を重視するような授業が論理的思考や自立心をはぐくむと思った。

②授業以外で

- ・ ゼミ、他学部の友達、先生との飲み会。卒業生になってもつながりが消えないのは楽しい。
- ・ 旅行。国内海外のいろんなところに行ける。行くことで得られるものがあると思う。
- ・ 社会学部学生リーダー育成プロジェクト。
- ・ 学プロ。一般の学生生活では得られない体験ができた。酒。酒。
- ・ 途中で辞めたけれど、部活で良き友人を得た。
- ・ 留学生をサポートする制度。いろいろな国の学生とかかわることで文化交流になる。留学生のサポートに限らず、学生ならではの活動は就活にも有利。
- ・ St. Andrew's Bar でそれまでかかわることのなかった教職員と知り合うことにより、人間関係ができたり、他（学部の）学問に興味を持つようになった。

(b) やっておけばよかったこと

①授業で

- ・ 授業にもっと出ること。雑談で小さな知識がたまっていく。
- ・ 授業にちゃんと出席すべきだったと後悔している。
- ・ ゼミ。
- ・ 社会調査（統計データを使う手法）のマスター。今、仕事で使っているが、「社会調査履修しておけばよかったー！！」と思わないように、社会調査の授業をとればよかった。統計は大事。
- ・ 授業の単位を取って社会調査士の資格を取ればよかった。

②授業以外

- ・ 海外留学。社会人になるととても行きにくい。まずお金がない。勇気もなかなか出ない。留学後の仕事が不安。よほどの能力があれば別だが、正社員としての再就職は難しい。また、親が若いので1～2年置いて行っても気が楽。
- ・ 海外留学。ワーキングホリデーは29歳以下という制限もあるうえ、今の職場を辞めてまで留学するリスクは高い。親に頭を下げてでも留学すべきだった。
- ・ お金がないなりに遊ぶ。キャンプ、海、喫茶巡り。計画を立てて外に出るのは役に立

つ。

- ・ 字の練習。字はきれいなほうが人生楽しい。
- ・ 簡単な算数。数字に慣れておくと、営業に限らず事務でも役に立つ。
- ・ いろいろな本、マンガをもっと読んでおけばよかった。これだけ本を読める時間があるのはこの先あまりないと思う。
- ・ 業界研究をもっとして、やりたい仕事・できそうな仕事・できない仕事の見極めをしておけばよかった。
- ・ 男ばかりの環境に居すぎた。社会に出たら恋愛は難しい。

09～12生と卒業後間もないOB・OGの回答であるためか、「4年生調査」の回答と重なる部分も多い。ゼミや授業で学んだことを評価すると同時に、授業にもっと出ておけばよかったとの意見、授業以外の場で教職員と接する機会があったことへの評価がうかがえる。「卒業生調査②」の特徴としては、ちょうど統計学やビックデータが話題になっていた時期でもあり、社会調査の授業を取っておいてよかった、取っておけばよかったという回答が目立つ。さらに、社会人になってからでは難しいので学生時代に留学しておけばよかったという意見は注目に値する。「卒業生調査②」の対象は若い世代であるため、日本社会全体で国際化への対応が高まっていることを反映しているのかもしれない。

「4年生調査」および2つの「卒業生調査」を通してみてきたことは、学生が授業やゼミにただ出席するだけではなく積極的に参加して周囲とかかわり能力を伸ばすための仕組み作り、授業以外でコミュニティを形成するための仕組み作りが求められていることだ。もちろん、本学にこのような取り組みがないわけではなく、すでに行われている取り組みも多い。その成果を共有して発展させることにより、学生の能力や意欲が高まるはずである。それにより学生生活全体への満足度や愛校心も高まり、本学の良き伝統が引き継がれるのではないだろうか。

(村上あかね)

7. 知の方法論的基盤からファカルティ・ディベロップメント (FD) の知的基盤へ —プロジェクトを振り返って

ここまで、社会調査教育を中心に、本プロジェクトで進めてきた研究の現段階について、いくつかのポイントに絞って振り返ってきた。最後に、以上の議論をふまえて、社会調査教育の将来像をめぐって示唆された課題について指摘して、本稿のまとめとしたい。

第一に、革新が著しい情報分析技術とどのようにかかわっていくかという点である。デジタルネイティブ世代に属し、とかくITについては教員などよりも明るいといわれる昨今の大学生だが、いざ実際に機器やソフトに触れてみると、意外なほどできることが限られることがわかる。これについては、パソコンのトレーニングの強化という方向性も考えられるが、

教育効果を着実に上げていくことや、あるいは授業をスムーズに進めることをめざすなら、むしろタブレット端末やスマートフォンの効果的な活用を検討するほうが近道なのかもしれない。大学生の日常生活や将来設計（キャリア・デザイン）に合致した機材や施設の整備を検討してもよいだろう。

第二に、これまでの本学の社会調査教育を振り返れば、計量分析を軸とした調査教育の体系化は進められてきたが、フィールドワークを中心とした質的な調査の教育体系の整備や教授法の開発については、いまだ教員が個別で手がけている部分も多く、体系化を検討する余地が十分にあるように思われる。今後の調査教育の充実を図っていくうえでは、こうしたそれぞれの演習等でのフィールドワークの蓄積を教育の体系化というかたちで整備して行くのもひとつの方向性だと思われる。

第三は、これについては第二の点ともかかわるが、社会的な課題と調査教育をどのように結びつけていくかという点である。近年の大学教育では、学部を問わず、企業や自治体、NPO等の外部機関と連携や、そこから生み出された成果を社会に還元していくことに対する関心が高まっているように思う。こうした大学教育に対する強い関心に対して社会調査教育はどのようにかかわっていくことができるのか。これについては早急に検討が必要な点だと思われるが、これについても、まずはこれまでの個別の教員の経験や実践をベースにした取りまとめが有効だと思われる。また、本稿でも取り上げた卒業生を対象にしたアンケート調査についても、われわれに有益な情報をもたらしてくれるツールとして今後の活用を積極的に検討していくべきであろう。

本プロジェクトの議論や成果からは、以上のような点が今後の課題として示唆された。社会調査は、社会学教育の中でも「方法論」に属する領域であるが、大学教育の潮流が大きく変化する中、少なくともこのプロジェクトを振り返って言えることは、今日の社会調査教育には、単なる「方法の教育」とどまらない役割が求められているし、またそうした役割を果たしうるということである。では、どのようにすればそのような役割を実際に果たしていくことができるのか。また、そこではどのような組織的な基盤やカリキュラムの構築が考えられるのか。こういった点の検討が、社会調査教育に共通する研究課題となってくるような現実の変化と今、われわれは相対しているのだと思う。

（大倉季久）

本稿は共同研究プロジェクト「『大学生』に関する総合的研究（Ⅲ）——学生の意欲と調査・研究能力を高める教材、および教授法の開発」（14共235）の成果報告である。

（2018年5月15日受理）

The Education of Social Research in Transition

— Current and Future of Learning Tools, Course Materials,
and Teaching Method —

KINOSHITA Eiji
MURAKAMI Akane
SAKAGUCHI Yusuke
TAKAI Masashi
YOSHIDA Keiko
SUMIYA Yoshinori
OHKURA Suehisa

In this article, we discuss the current and the future challenges on teaching and learning social research. Education of social research is one of the core programs in education of sociology. Students can take many kinds of lectures and practices in this course. But now is the transitional period for the university with the changing needs and expectations to the academic education. Thus, we study the development of new learning tools and teaching methods with utilizing the accumulation of each member's educational practice. Among these studies, we introduce the following subjects.

1. Practice in Social Research
2. Statistical Analysis
3. Fieldwork
4. First Year Experience at University
5. Teaching Assistants (TA) · Student Assistants (SA)
6. Questionary Investigation of Alumni and Seminar Students

Academic education is now desired to establish new methods of teaching and learning, such as active learning methods, collaboration with external organizations. Education of social research is no exception. How can we involve these lively interests? This is the subject that we have to perform an inspection immediately.

桃山学院大学

総合研究所紀要

Vol.44 No.2 2019.1

〔特定個人研究〕

論 文

知られざる敵性外国人：

オーストラリア人の見たタツラ収容所の日本人（2）……………金 本 伊津子 （ 1 ）

バングラデシュ独立戦争の映画表象 ……………南 出 和 余 （ 15 ）

3歳からできる「たべたのだあれ？」視力検査

——三歳児眼科健診で行なわれている視力検査の現状と課題から——……………高 橋 ひとみ
衛 藤 隆 （ 31 ）

共働的コミュニティにおける人の採用・教育・成長

——ネットトヨタ南国のケース—— ……………山 田 伊知郎 （ 43 ）

〔共同研究〕

論 文

《琉球—沖縄》における海上からの「来訪者」と天変地異の「記憶」

——ウルマ島とニライカナイをめぐる——……………一 色 哲 （ 55 ）

高齢者と図書館・生涯学習への大学教育の活用：

大学図書館の地域貢献を中心に ……………志保田 務 （ 67 ）

社会調査教育の現段階と将来像

——大学教育の転換期における教材・教授法の開発——

……………木 村 栄 二
阪 祐 あ ね
高 昌 か
吉 昌 介
角 惠 吏
大 嘉 子
倉 季 則
久

近世・近代堺の都市史・地域史研究の可能性 ……………島 田 克 彦 （ 107 ）



桃山学院大学総合研究所